

## 高齢者の生きがい満足度，ソーシャル・サポートと 知的低下との関係

原 岡 一 馬<sup>1)</sup>

### 要 約

本研究の目的は、生きがい満足度の違いが知的程度やソーシャル・サポートにどのように影響しているかを確かめることである。被調査者は65歳以上の高齢者160名（男性39名，女性121名）の人たちである。

調査は、生きがい満足度調査，かな拾いテスト，ソーシャル・サポート調査の3種であった。まず，生きがい満足度調査質問項目とソーシャル・サポート調査の信頼性を検討し，次に，年齢段階，生きがい満足度，安定満足度，積極満足度，ソーシャル・サポート，知的程度の相互関係を示し，更に，性差，年齢段階，生きがい満足度の違いによる知的程度としてのかな拾いテスト得点の比較，ソーシャル・サポート得点の比較および1年間の生きがい満足度の変化と知的水準の変化の関係などを検討した。

その結果，年齢は，生きがい満足度，安定満足度，積極満足度，ソーシャル・サポート，知的程度，知的程度の変化量とマイナスに相関していた。また，かな拾いテスト得点と積極満足度とに負の有意な関係があり，年齢が高まるほど知的程度が低くなり，積極満足度が低下していることがわかった。

また，生きがい満足度はソーシャル・サポートと有意に高い相関を示しており，生きがい満足度の高い人は社会的援助を多く受け，また，知的程度も高いことがわかった。さらに，知的程度は，生きがい満足度，安定満足度および積極満足度得点と有意な関係があった。

年齢段階は，生きがい満足度得点ともソーシャル・サポート得点とも有意な関係がみられなかった。

主要な結果として，生きがい満足度の高い群ほど知的程度が有意に高くなっており，また，ソーシャル・サポート得点が有意に高くなっていた。つまり，高い生きがい満足度をもつことが高い知的水準を保ち，ソーシャル・サポートを多く受けることがわかった。

さらに，1年間の変化の量と方向から考えると，知的変化の上昇度の高い群ほど生きがい満足度の変化量もプラスに高くなっていて，生きがい満足度の変化と知的変化の方向と程度にプラスの有意な関係があり，生きがい満足度が高くなればなるほど知的水準を高め，逆に低くなればなるほど知的低下をきたすことを確認した。知的変化の方向とソーシャル・サポート得点の変化とはその方向においては共通していたが，その関係は有意とまではいかなかった。

**キーワード：**高齢者，生きがい満足度，ソーシャル・サポート，知的低下

---

1) 久留米大学文学部

## 問 題

高齢化社会になって、高齢者の健康と痴呆予防の在り方が社会問題となりつつあるが、伊万里市では、行政と地域のボランティアとが協力して、高齢者の痴呆予防システムづくり運動を展開して以来10年近くなる。これら地域活動を通して、高齢者が楽しく生きがいをもてるようになり、知的低下の予防が推進されてきていることがこれまでの一連の実践研究から明らかになってきた（原岡：1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 2000, 2002）。その活動の主なものは「健康教室」と「生きがいづくり教室」であり、対象地区を設定し、「健康教室」では、健康講話、健康相談、歯科検診、「かな拾いテスト」、レクリエーション、試食会などを行い、また、「生きがいづくり教室」では、リズム運動教室、陶芸教室、カラオケ教室、大正琴教室、囲碁教室などを設定し、毎週1回、あるいは隔週1回などの間隔で実施し、高齢者の参加を呼びかけてきた。また、地域社会全体として、隣近所の助け合い活動が必要なことと同時に働きかけてきた。

これらの地域活動に参加した高齢者たちは、日常生活が生き生きとしており、相互に援助し合っていることが推測できる。原岡はこれまでの研究（1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 2000, 2002）から、どの年度においても一貫して、高齢者の生き方、特に、生きがい満足度と知的程度とに高い関連があることを明らかにした。特に、積極的に生きがいをもって生きている人たちは、大きな知的低下をきたさないまま人生を楽しく送っていることがわかった。また、お互いに援助し合う機会も多いことから、社会的孤立者が少ないものと思われる。

そこで、本研究では、主として、2001年度に調査した回答を基に、これまでの結果を確かめ、生きがい満足度、ソーシャル・サポート、「かな拾いテスト」得点による知的水準の関係を確かめると共に、生きがい満足度の違いが知的程度やソーシャル・サポートにどのように影響しているかを確かめてみることにする。

具体的には、まず、対象者の構成に関する分類基準、つまり、性別の構成、年齢段階の違いによる生きがい満足度、ソーシャル・サポートの程度、知的程度、などの相互関連性を確かめること、第二に、生きがい満足度の違いによる知的水準の比較、ソーシャル・サポートの比較を行うことを目的とする。

## 方 法

### Ⅰ. 調査対象

調査対象者は、佐賀県伊万里市黒川町在住の65歳以上の高齢者で、平成12年度と平成13年度の両方とも、生きがい満足度調査、「かな拾いテスト」、ソーシャル・サポート（社会的援助）調査のすべてに参加し、回答漏れのなかった160名（男性39名、女性121名）の人たちである。性別と年齢段階ごとの人数は、Fig.1-1, Fig.1-2 のとおりである。

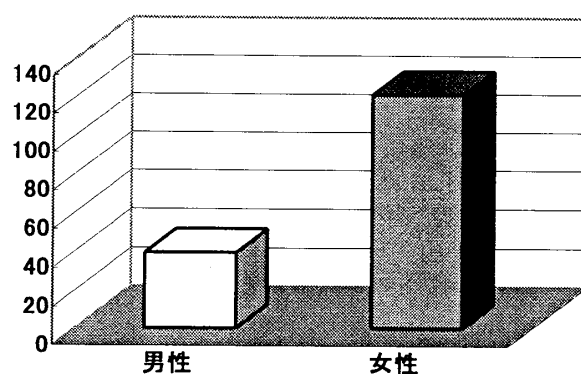


Fig. 1-1 参加者の性別構成

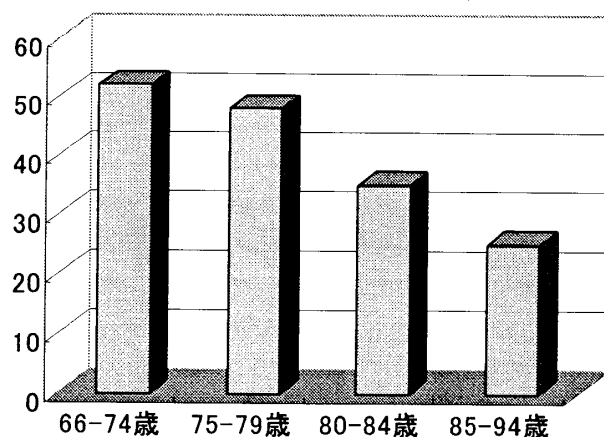


Fig. 1-2 参加者の年齢構成

### Ⅱ. 調査方法

これまで行ってきた調査と同様、知的精神機能の検査は個人検査で、検査者は地域の老人と接触を持つ精神科医であり、生き方・態度調査およびソーシャル・サポート調査は個人面接調査で、面接者は対人関係に経験があり、日頃この地域の老人たちと接触を持ち社会福祉に関心を持つ地域婦人リーダーと保健婦である。

なお、「生きがいづくり教室」への参加については、リズム運動教室、陶芸教室、カラオケ教室、大正琴教室、囲碁教室など、痴呆予防システムづくり事業が推進してきた教室への実質的参加度をもとに参加者と非参加者とに分けて検討したが、年間を通して、全地域にわたって比較可能なほど妥当で信頼性のある参加記録を得ることが困難であったため、これについては、詳細な検討を省くことにした。

### Ⅲ. 調査の内容

本研究で行われた調査領域は次の通りである。

#### (1) 知的精神機能の調査

①精神的特性の調査は、これまでの研究に使用したものと同様、金子(1990)の「かな拾いテスト」であり、個別的心理テストである。

「かな拾いテスト」は、一定の時間内に、複数の仕事に注意力を分散させ、最初の課題をどのようにさばけるかを測るもので、「ひらがな」で書かれた簡単な文章の中から、意味を読み取りながら同時に「あいうえお」の母音を拾い上げて○をつけていくもので、検査時間は2分間である。これまで調査された結果では、得点は高齢になるにつれて低下の傾向が見られている。

#### (2) 生きがい満足度の調査

生きがい満足度の調査は、最初の研究(原岡:1995)で検討し、その後の研究(1996)で使用してきた生活の8領域についての満足度の質問であり、①生活への満足感(4段階)、②生活へのやすらぎ感(4段階)、③心の張り(4段階)、④生活目標(4段階)、⑤頼りにされている感じ(4段階)、⑥認められている感じ(4段階)、⑦能力発揮の場(4段階)、⑧新しいことへ取り組む姿勢(4段階)であり、因子分析の結果、**1. 安定満足**(①、②、③)と**2. 積極満足**(④、⑤、⑥、⑦、⑧)の2因子から構成されたものである。

#### (3) ソーシャル・サポート調査

ISEL (Cohen, S. & Wills, T.A., 1985) と SSQN (Sarason I.G., et al. 1983), 浦ら(1989), 野口(1991)の尺度を参考に、高齢者向け尺度を作成したもので、前年度行った調査と同様である。その内容は、①一緒に会って楽しくときを過ごせる人、②留守のときなど用事を頼める人、③気を配ったり思いやりしてくれる人、④困ったとき気軽に相談できる人、⑤さびしいとき電話をしたり訪ねたりしておしゃべりできる人、⑥元気づけてくれる人、⑦あなたを大切にしたり高く評価してくれる人、⑧心配事や不安なとき親身になって助言してくれる人、⑨一緒にいると落ち着いた気分になれる人、⑩病気で寝込んだとき身の回りの世話をしてくれる人の10の領域を選び、1) 何人もいる、2) 少しはいる、3) あまりいない、4) ほとんどいないの4段階尺度で回答を求め、1) への回答を4点、2) を3点、3) を2点、4) を1点とし、総合点でソーシャル・サポート得点とした。

### 結果および考察

#### 1. 生きがい満足度質問紙の構造と信頼性

これまで、行ってきた生きがい満足度質問紙をこの被調査者の反応を通して因子分析を行い、再度確かめてみることにした。これまで設定していた安定満足の因子と積極満足の因子が見出されるか、また、両因子間に中程度の関連があるのではないかとと思われることから、因子の抽出を主因子法を用い、斜交回転をプロマックス法を用いて行った結果、Table 1のような結果が得られた。

Table 1の結果、2つの因子が抽出され、積極満足と安定満足の因子が得られた。それらの信頼係数は、第一因子の積極満足が $\alpha = .840$ 、第二因子の安定満足が $\alpha = .890$ であって、ともに高い信頼性が確認された。

Table 1 生きがい満足度の因子分析

| 質問項目           | I 積極満足       | II 安定満足      | 共通性   |
|----------------|--------------|--------------|-------|
| g 能力発揮の場       | <b>0.762</b> | -0.009       | 0.954 |
| f 認められている感じ    | <b>0.740</b> | 0.002        | 0.882 |
| e 頼りにされている感じ   | <b>0.694</b> | 0.006        | 0.460 |
| h 新しいことへ取り組む姿勢 | <b>0.656</b> | -0.008       | 0.464 |
| d 生活目標         | <b>0.653</b> | 0.005        | 0.530 |
| c 心の張り         | <b>0.491</b> | 0.278        | 0.561 |
| a 生活への満足感      | -0.108       | <b>1.028</b> | 0.517 |
| b 生活へのやすらぎ感    | 0.008        | <b>0.781</b> | 0.380 |

なお、両因子間の相関は、 $r=.518$ である。

## II. ソーシャル・サポート質問紙の構造と信頼性

ソーシャル・サポートの質問紙の因子構造と信頼性については、概念的妥当性だけを検討しただけで、十分検討してこなかったため、ここで、因子分析を行いその構造と信頼性を検討することにする。この場合も主因子法を用いることにした。その結果、Table 2に示すように、I 因子を見出すことができ、 $\alpha=.931$ 、ときわめて高い信頼係数を得ることができた。

以上のような過程を通して得られた、生きがい満足度調査、ソーシャル・サポート調査は、それぞれ適切な妥当性と信頼性をもつものと考えられる。

このようにして得られた生きがい満足度調査、ソーシャル・サポート調査と「かな拾いテスト」の結果は、まず、年齢段階、生きがい満足度、安定満足度、積極的満足度、ソーシャル・サポート、知的程度の相互関係を示して、対象者の一般的傾向を明らかにし、次に、性差、年齢段階、生きがい満足度の違いによる知的程

度としての「かな拾いテスト」得点の比較、ソーシャル・サポート得点の比較などを検討し、更に、知的変化に伴う生きがい満足度の変化およびソーシャル・サポート得点の変化を検討することにする。

## I. 年齢段階、生きがい満足度、ソーシャル・サポート、知的程度の相互関係

痴呆予防システムづくり活動の中で、2000年度および2001年度の生きがい満足度調査、ソーシャル・サポート調査、「かな拾いテスト」を受けた高齢者160名について、年齢、生きがい満足度、安定満足度、積極的満足度、ソーシャル・サポート得点、「かな拾いテスト」得点、「かな拾いテスト」得点の1年間の変化量、間の相互関係をピアソンの相関係数で示したものが Table 3である。

Table 3からわかるように、年齢は、生きがい満足度、安定満足度、積極的満足度、ソーシャル・サポート、知的程度、知的程度変化量とマイナスに相関しているが、その中で、「かな拾いテスト」得点と年齢とに負

Table 2 ソーシャル・サポートの因子分析

| 質問項目                         | サポート  | 共通性   |
|------------------------------|-------|-------|
| ④困ったとき気軽に相談出来る人              | 0.850 | 0.557 |
| ⑧心配事や不安なとき親身になって助言してくれる人     | 0.843 | 0.413 |
| ⑨一緒にいると落ち着いた気分になれる人          | 0.812 | 0.610 |
| ⑥元気づけてくれる人                   | 0.811 | 0.723 |
| ③気を配ったり思いやりしてくれる人            | 0.781 | 0.457 |
| ①一緒に会って楽しくときを過ごせる人           | 0.746 | 0.657 |
| ⑦あなたを大切にしたり高く評価してくれる人        | 0.727 | 0.528 |
| ⑩病気で寝込んだとき身の回りの世話をしてくれる人     | 0.708 | 0.711 |
| ⑤さびしいとき電話をしたり訪ねたりしておしゃべりできる人 | 0.676 | 0.659 |
| ②留守のときなど用事を頼める人              | 0.643 | 0.501 |

Table 3 年齢段階、生きがい満足度、ソーシャル・サポート、知的程度の相互相関

|         | 年齢       | 満足     | 安定     | 積極     | so.su01 | kan01 | k01-00 |
|---------|----------|--------|--------|--------|---------|-------|--------|
| 年齢      | 1        |        |        |        |         |       |        |
| 満足度     | -0.16595 | 1      |        |        |         |       |        |
| 安定満足    | -0.06065 | 0.8201 | 1      |        |         |       |        |
| 積極満足    | -0.20247 | 0.9319 | 0.5567 | 1      |         |       |        |
| so.su01 | -0.09569 | 0.4641 | 0.2765 | 0.4985 | 1       |       |        |
| kan01   | -0.23626 | 0.3467 | 0.3598 | 0.2752 | 0.069   | 1     |        |
| k01-00  | -0.07424 | 0.0604 | 0.1133 | 0.0186 | -0.05   | 0.426 | 1      |

ここで、so.su.01は、2001年度のソーシャル・サポート得点、Kan.01は2001年度の「かな拾いテスト」得点、k01-00は、2000年度と2001年度の「かな拾いテスト」得点の変化量で、プラスは知的得点が高まったことを意味する。

の有意な関係があり、年齢が高まるほど知的程度が低くなり、積極満足度が低下していることがわかる。

しかし、安定満足度やソーシャル・サポートの量とは有意な関係はみられていない。このことから、年齢による知的程度の低下は積極満足度の低下によるものであろうと解釈できる。

また、生きがい満足度はソーシャル・サポートと  $r=.464$ , 「かな拾いテスト」得点と  $r=.347$  と有意に高い相関を示しており、生きがい満足度の高い人は社会的援助を多く受けており、また、知的程度も高いことがわかる。また、知的程度を基準に考えると、生きがい満足度、安定満足度および積極満足度得点との関係が年齢との関係より高く、高い生きがい満足度を持つことは知的低下を防止することにつながると解釈される。また、安定満足度は年齢段階とはほとんど関係がない ( $r=-.006$ ) ことがわかる。

これらの結果は、これまでの研究結果(原岡: 1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001)をさらに確証したものといえよう。

## II. 年齢、生きがい満足度、かな拾い得点、ソーシャル・サポート得点、についての性差

男性と女性とで、年齢、生きがい満足度、かな拾い得点、ソーシャル・サポート得点、について比較を行った。

Table 4 からわかるように、「かな拾いテスト」得

点については、女性がやや高い傾向を示しているものの有意ではなく、どの測度においても有意な性差は見られなかった。したがって、女性が男性より年齢、生きがい満足度、かな拾い得点、ソーシャル・サポート得点において高いのではないかという見方は否定された。このことは、男性の参加者が39名、女性の参加者が121名と大きく違うことから、女性の方が積極的な人が多いと推測されるが、調査に参加した人だけについての男女差を比較すると諸特性に違いは見られない。このことは、積極的な人々の間では、男女差は見られなかったと解釈することができよう。

次に、年齢段階を基準に諸特性を比較してみることにする。

## III. 年齢段階による諸特性の比較

年齢が高くなるにつれ、知的水準、生きがい満足度、ソーシャル・サポートなどに違いがみられるであろうか。

### ①年齢段階と知的程度の関係

知的程度を「かな拾いテスト」得点で示すことにし、年齢段階を66歳-74歳、75歳-79歳、80歳-84歳、85歳-94歳の4段階に分けて比較したのが、Table 5-1, Table 5-2 である。また、これを図に示したのが Fig. 2 である。

Table 4 各特性平均得点の性差

| 性別 | 年齢    | 生きがい   | かな拾い   | Soc.Sup. |
|----|-------|--------|--------|----------|
| 男性 | 77.21 | 25.462 | 20.769 | 32.897   |
| 女性 | 78.50 | 26.083 | 23.942 | 33.686   |

Table 5-1 年齢段階と知的程度の関係

| 年齢段階   | 標本数 | 平均    | 分散     |
|--------|-----|-------|--------|
| 85-94歳 | 25  | 18.20 | 95.08  |
| 80-84歳 | 35  | 21.54 | 75.55  |
| 75-79歳 | 48  | 23.98 | 105.21 |
| 66-74歳 | 52  | 25.90 | 114.36 |

Table 5-2 年齢段階による知的程度の分散分析

| 変動要因  | 変動       | 自由度 | 分散      | 分散比    | P値      |
|-------|----------|-----|---------|--------|---------|
| グループ間 | 1130.26  | 3   | 376.753 | 3.7607 | 0.01212 |
| グループ内 | 15628.18 | 156 | 100.181 |        |         |
| 合計    | 16758.44 | 159 |         |        |         |

Table 5-1, Table 5-2 および Fig. 2 からわかるように、年齢段階が増加するにつれ「かな拾いテスト」得点は有意に低下している。この傾向は、これまでの研究結果を再確認したことになる。

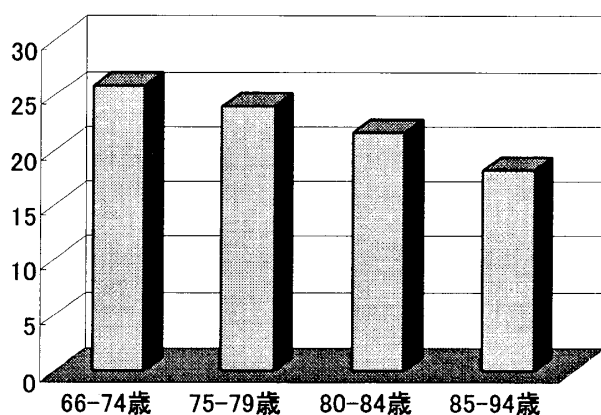


Fig. 2 年齢段階と「かな拾いテスト」得点との関係

Table 6 年齢段階と生きがい満足度得点

| 年齢段階   | 標本数 | 平均    | 分散    |
|--------|-----|-------|-------|
| 85-94歳 | 25  | 24.56 | 18.17 |
| 80-84歳 | 35  | 25.89 | 14.34 |
| 75-79歳 | 48  | 26.27 | 19.99 |
| 66-74歳 | 52  | 26.31 | 12.45 |

Table 7 年齢段階とソーシャル・サポート得点

| 年齢段階   | 標本数 | 平均    | 分散    |
|--------|-----|-------|-------|
| 85-94歳 | 25  | 33.28 | 45.79 |
| 80-84歳 | 35  | 33.03 | 18.56 |
| 75-79歳 | 48  | 33.60 | 18.29 |
| 66-74歳 | 52  | 33.81 | 18.63 |

Table 8-1 生きがい満足度の段階と「かな拾いテスト」得点

| 満足度段階 | 標本数 | 平均    | 分散     |
|-------|-----|-------|--------|
| 満足度上  | 46  | 26.74 | 115.62 |
| 満足度中  | 63  | 24.70 | 94.31  |
| 満足度下  | 51  | 18.06 | 72.86  |

Table 8-2 生きがい満足度の段階による「かな拾いテスト」得点の分散分析

| 満足度段階 | 変動       | 自由度 | 分散      | 分散比     | P値      |
|-------|----------|-----|---------|---------|---------|
| グループ間 | 2065.481 | 2   | 1032.74 | 11.0352 | 3.3E-05 |
| グループ内 | 14692.96 | 157 | 93.5858 |         |         |
| 合計    | 16758.44 | 159 |         |         |         |

## ②年齢段階と生きがい満足度およびソーシャル・サポートとの関係

これは、Table 6, Table 7 に示すように、年齢段階は、生きがい満足度全得点とも、下位尺度としての安定満足度とも積極満足度とも有意な関係はなく、また、ソーシャル・サポート得点とも有意な関係はみられなかった。このことから、年齢が高くても生きがい満足度の高い人もあり、年齢が低くても満足度が低い人もいることがわかる。また、ソーシャル・サポートの得点も年齢段階間に違いはなく、年齢に関係なくソーシャル・サポートを多く受けている人とあまり受けていない人とがいることが判った。

## IV. 生きがい満足度段階による諸特性の比較

### ①生きがい満足度の段階と「かな拾いテスト」得点

生きがい満足度を平均より1/2 SD 以上高い者つまり上位群と平均±1/2 SD 以内の中位群、平均より1/2 SD 以下の下位群の3群に分け、「かな拾いテスト」得点を比較したのがTable 8-1, Table 8-2である。また、これを図に示したのがFig. 3である。

Table 8-1, Table 8-2 および Fig. 3 からわかるように、「かな拾いテスト」得点の平均は、生きがい満足度上位群、26.74、中位群24.70、下位群18.06であり、生きがい満足度の高い群ほど知的程度が有意に高くなっ

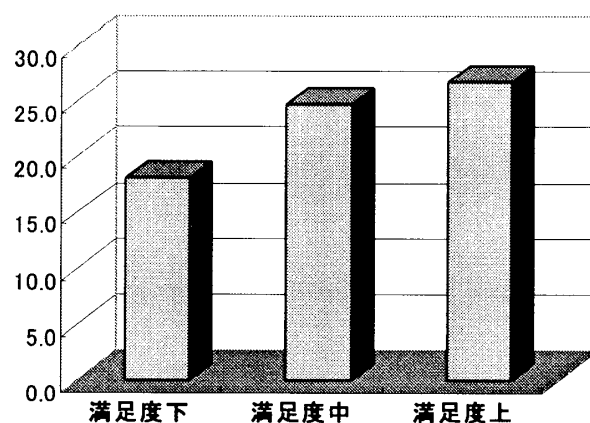


Fig. 3 生きがい満足度の段階と「かな拾いテスト」得点

Table 9-1 生きがい満足度の段階とソーシャル・サポート得点との関係

| 満足度段階 | 標本数 | 平均    | 分散    |
|-------|-----|-------|-------|
| 満足度上  | 46  | 36.48 | 13.32 |
| 満足度中  | 63  | 33.33 | 16.61 |
| 満足度下  | 51  | 31.00 | 23.92 |

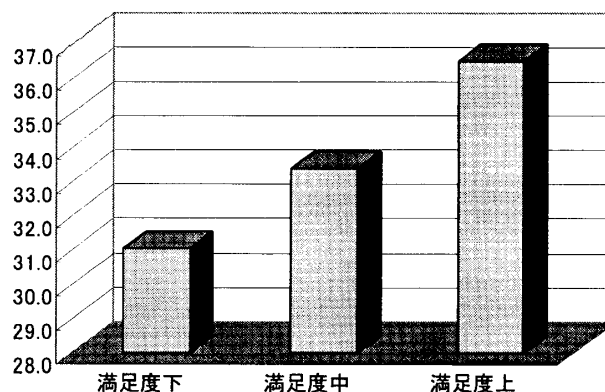


Fig. 4 生きがい満足度の段階とソーシャル・サポート得点との関係

Table 9-2 生きがい満足度の段階によるソーシャル・サポート得点の分散分析

| 変動要因  | 変動       | 自由度 | 分散      | 分散比     | P値      |
|-------|----------|-----|---------|---------|---------|
| グループ間 | 728.5155 | 2   | 364.258 | 20.2403 | 1.5E-08 |
| グループ内 | 2825.478 | 157 | 17.9967 |         |         |
| 合計    | 3553.994 | 159 |         |         |         |

ている。つまり、高い生きがい満足度をもつことが高い知的水準を保つことになる。この結果はこれまでの研究結果を確認したことになる。

## ② 生きがい満足度の段階とソーシャル・サポート得点との関係

生きがい満足度を高く保つことは知的水準の維持ばかりでなく、社会的援助も多く得られているのではないかと仮定される。そこで次に、生きがい満足度上位群、中位群、下位群の3群間のソーシャル・サポート得点を比較したのがTable 9-1, Table 9-2である。また、これを図に示したのがFig. 4である。

Table 9-1, Table 9-2 および Fig. 4 からわかるように、ソーシャル・サポート得点の平均は、生きがい満足度上位群、36.48、中位群33.33、下位群31.00で、生きがい満足度の高い群ほどソーシャル・サポートの程度が有意に高くなっている。この結果はソーシャル・サポートを十分受けているほど生きがい満足度が高いという結果を確認したことになる。

## ③ 1年間の「かな拾いテスト」得点の変化と生きがい満足度の変化との関係

前節で、生きがい満足度の高さが知的程度やソーシャル・サポート得点に影響していることがわかったが、

知的程度の変化は、生きがい満足度の変化が影響しているからではないかと考えられる。そこで、「かな拾いテスト」得点の1年間の変化量をもとに、知的得点の上昇群と不変・下降群の2群に分け、生きがい満足度得点の1年間の変化量を比較してみることにする。「かな拾いテスト」得点の上昇群は35名、不変・下降群は38名に分けることができた。これを基準にして、1年間の生きがい満足度の変化量を検討したのが、Table 10-1, Table 10-2 および Fig. 5 である。

Table 10-1, Table 10-2 および Fig. 5 からわかるように、かな拾い得点変化の上昇群と不変・下降群との生きがい満足度得点は、上昇群3.429、不変・下降群1.289で、有意に違いがあることが分かる。このことは、知的程度の上昇は生きがい満足度の上昇と高い関連があり、生きがい満足度を高く保つことは知的水準を高く保つことにつながると解釈できる。

つぎに、「かな拾いテスト」得点の1年間の変化量をもとに、知的得点の上昇群と不変・下降群の2群に分け、ソーシャル・サポート得点の1年間の変化量を比較してみることにする。その結果が、Table 11-1, Table 11-2 および Fig. 6 である。

この結果、知的変化の方向とソーシャル・サポート得点の変化とはその方向においては共通していたが、その関係は有意とまではいかなかった。

Table 10-1 1年間の「かな拾いテスト」得点の変化との生きがい満足度の変化関係

| 知的変化  | 標本数 | 平均    | 標準偏差 |
|-------|-----|-------|------|
| 上昇    | 35  | 3.429 | 4.58 |
| 不変・下降 | 38  | 1.289 | 4.37 |

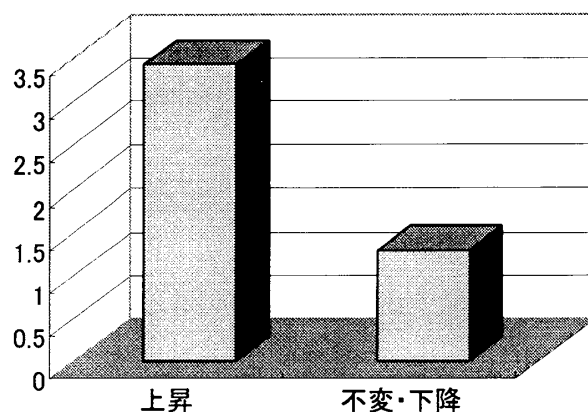


Fig. 5 1年間の「かな拾いテスト」得点の変化との生きがい満足度の変化関係

Table 10-2 1年間の「かな拾いテスト」得点の変化による生きがい満足度の変化の分散分析

| 変動要因  | 変動         | 自由度 | 分散     | 分散比   | P値    |
|-------|------------|-----|--------|-------|-------|
| 知的変化  | 83.3662    | 1   | 83.366 | 4.161 | p<.05 |
| error | 1422.38722 | 71  | 20.034 |       |       |
| total | 1505.75342 | 72  |        |       |       |

Table 11-1 1年間の「かな拾いテスト」得点の変化とソーシャル・サポート得点の変化との関係

| 知的変化  | 標本数 | 平均    | 標準偏差 |
|-------|-----|-------|------|
| 上昇    | 35  | 1.314 | 6.64 |
| 不変・下降 | 38  | 0.789 | 4.95 |

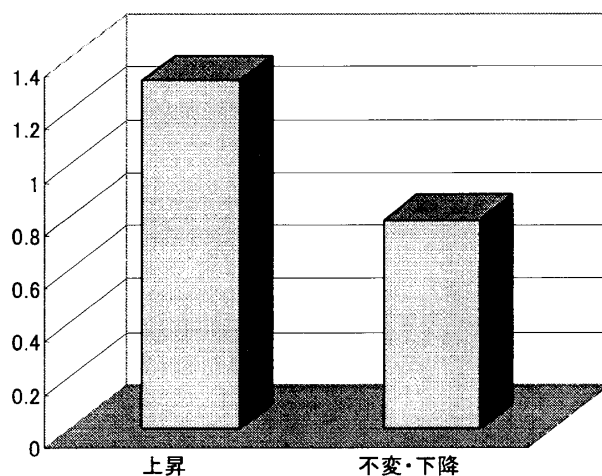


Fig. 6 1年間の「かな拾いテスト」得点の変化とソーシャル・サポート得点の変化との関係

Table 11-2 1年間の「かな拾いテスト」得点の変化によるソーシャル・サポート得点の変化の分散分析

| 変動要因  | 変動       | 自由度 | 分散     | 分散比   | P値  |
|-------|----------|-----|--------|-------|-----|
| 知的変化  | 5.018    | 1   | 5.018  | 0.148 | non |
| error | 2405.859 | 71  | 33.885 |       |     |
| total | 2410.877 | 72  |        |       |     |



以上の結果より、生きがい満足度を高めることが知的低下を予防し、生き生きと生きることができ、そのことは、人間的関係を広め、他者からの社会的援助をより多く受ける傾向にあると考えられる。この結果は、過去10年間の「痴呆予防システムづくり」という地域活動の有効性を確証したものと考えられる。

## 要 約

本研究では、生きがい満足度の違いが知的程度やソーシャル・サポートにどのように影響しているかを確かめてみた。被調査者は佐賀県伊万里市黒川町在住の65歳以上の高齢者で、平成12年度と平成13年度の両方とも、生きがい満足度調査、「かな拾いテスト」、ソーシャル・サポート調査のすべてに参加し、回答漏れのなかった160名（男性39名、女性121名）の人たちである。

調査方法は、これまで行ってきた調査と同様、知的精神機能の検査は個人検査で、検査者は地域の老人と接触を持つ精神科医であり、生き方・態度調査およびソーシャル・サポート調査は個人面接調査で、面接者は対人関係に経験があり、日頃この地域の高齢者たちと接触を持ち社会福祉に関心を持つ地域婦人リーダーと保健婦である。

結果は、まず、生きがい満足度調査質問項目とソーシャル・サポート調査の因子構造と信頼性を検討し、次に、年齢段階、生きがい満足度、安定満足度、積極満足度、ソーシャル・サポート、知的程度の相互関係を示し、更に、性差、年齢段階、生きがい満足度の違いによる知的程度としての「かな拾いテスト」得点の比較、ソーシャル・サポート得点の比較および1年間の生きがい満足度の変化と知的水準の変化の関係などを検討した。

その結果、まず、生きがい満足度測定尺度、ソーシャル・サポート尺度はその信頼性と妥当性が確かめられた。

年齢は、生きがい満足度、安定満足度、積極満足度、ソーシャル・サポート、知的程度、知的程度変化量とマイナス方向に相関しているが、その中で、「かな拾いテスト」得点と積極満足度とに負の有意な関係があり、年齢が高まるほど知的程度が低くなり、積極満足度が低下していることがわかった。

また、生きがい満足度はソーシャル・サポートと有意に高い相関を示しており、生きがい満足度の高い人は社会的援助を多く受け、また、知的程度も高いことがわかった。さらに、知的程度を基準に考えると、生きがい満足度、安定満足度および積極満足度得点との

関係が高く、また、安定満足度と年齢段階とはほとんど関係がないことがわかった。

年齢段階が増加するにつれ「かな拾いテスト」得点は有意に低下していた。この傾向は、これまでの研究結果を再確認したことになる。しかし、年齢段階は、生きがい満足度得点ともソーシャル・サポート得点とも有意な関係がみられなかった。

主要な結果として、生きがい満足度の高い群ほど知的程度が有意に高くなっており、また、ソーシャル・サポート得点が有意に高くなっていた。つまり、高い生きがい満足度をもつことが高い知的水準を保ち、ソーシャル・サポートを多く受けていることがわかった。

さらに、1年間の変化の量と方向から考えると、知的変化の上昇度の高い群ほど生きがい満足度の変化量もプラスに高くなっていて、生きがい満足度の変化と知的変化の方向と程度にプラスの有意な関係があり、生きがい満足度が高くなればなるほど知的水準を高め、逆に低くなればなるほど知的低下をきたすことを確認した。知的変化の方向とソーシャル・サポート得点の変化とはその方向においては共通していたが、その関係は有意とまではいかなかった。

以上の結果より、生きがい満足度を高めることが知的低下を予防し、生き生きと生きることができ、そのことが人間的関係を広め、他者からの社会的援助をより多く受ける結果にもつながると考えられる。この結果は、過去10年間の「痴呆予防システムづくり」という地域活動の有効性を確証したものと考えられる。

## 参 考 文 献

- Cohen, S. & Wills, T.A., 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*. 98. 310-357.
- 柄澤昭秀他 老年期 1987, 日本放送出版協会
- 金子満雄 1990, 一般医家のための老人性痴呆, 南江堂
- 加藤伸司 1991, 改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)の作成 老年精神医学雑誌 2, 11, 1339-1347.
- 大塚俊男 1992, 高齢者のための知的機能検査の手引き 昭英社
- 原岡一馬・河合優年 1988, 老人問題に関する総合的・実証的研究 報告書, 名古屋大学教育学部教育心理学研究室, 1-253.
- 原岡一馬 1990, 地域福祉の問題と実態, 文部省特定研究「教育の場における相互作用の実証的総合的研

- 究」, 名古屋大学教育学部, 71-118.
- 原岡一馬 1993, 人間の社会的形成と変容 ナカニシヤ出版.
- 原岡一馬 1996, 老年期における社会的認知と自己思考—Pratt と Norris の老化の社会心理から—, 比較文化年報, No.5, 1-57.
- 原岡一馬 1996, 老人の知的低下と生き方の関係, 久留米大学文学部紀要, 人間科学科編, No,9・10, 1-35.
- 原岡一馬 1996, 積極的生き方と老化予防との関係, 久留米大学文学部紀要, 人間科学科編, No,9・10, 87-130.
- 原岡一馬 1997, The Relationship between Lifestyle and the Deterioration of Mental Faculties. 久留米大学比較文化研究科年報, 第6輯, 1-18.
- 原岡一馬 1997, 老人の知的低下と生き方の関係, —縦断的研究を通して— 久留米大学文学部紀要, 人間科学科編, No,11, 1-20.
- 原岡一馬 1998, 高齢者の知的変化, ソーシャル・サポートと生きがい満足度の関係, —生活満足度, 性差について— 久留米大学文学部紀要, 人間科学科編, No,12・13, 1-24.
- 原岡一馬 2000, 生きがいづくり教室参加とその効果 II 久留米大学文学部紀要, 人間科学科編, No,17・18, 1-20.
- 原岡一馬 2002, 「生きがいづくり教室」参加とその効果 III 久留米大学文学部紀要, 人間科学科編, No,19, 9-21.
- 長谷川和夫 1994, 老年痴呆に負けたくない人へ 東洋出版
- 野口裕二 1991 高齢者のソーシャル・サポート—その概念と測定— 社会老年学, 34, 37-48.
- Sarason, I.G., Levine, H., Bashaman, R. & Sarason, B.R. 1983 Assessing social support: The social support questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 127-139.
- 浦 光博・南 隆男・稲葉昭英 1989 ソーシャル・サポート研究: 研究の新しい流れと将来の展望 社会心理学研究, 4, 78-90.

## Relations between worth living satisfaction rating scores, social support scores, and intellectual decrease score of senior citizens

KAZUMA HARAOKA (*Graduate school of Psychology, Kurume University*)

### Summary

The purpose of this research is to confirm how the difference of the worth living satisfaction rating influences on intellectual level and the social support.

The people who are investigated are the people of 160 senior citizens of 65 years old or more (39 men and 121 females).

There were three kinds of investigations, that is, the worth living satisfaction rating investigation, Japanese syllable picking up test, and the social support investigation.

First of all, It was examined the reliability of the worth living satisfaction rating investigation question items and of the social support investigation. Next, the interrelations between age stages, a worth living satisfaction ratings, stability satisfaction ratings, degrees of positive satisfactions, social support, and intellectual levels were shown. In addition, comparison of Japanese syllable picking up test scores as intellectual level, age stage, and worth living satisfaction rating, The relation among the comparison of a social support scores, the changes in the worth living satisfaction rating of one year, and the change in intellectual levels were examined.

As a result, the levels of the age showed a negative correlation between a worth living satisfaction rating, a stability satisfaction rating, a positive satisfaction degree, a social support, an intellectual level, and the amounts of the intellectual level change.

Moreover, there is a negative significant relation between Japanese syllable picking up test score and the positive satisfaction degree. It has been understood that an intellectual level lowers, and the positive satisfaction degree has decreased by the rise of the age.

In addition, the worth living satisfaction rating shows a significantly high correlation to the social supports. The person with high worth living satisfaction rating receives a lot of social help, and also an intellectual level is high. An intellectual level showed the significant relation to the worth living satisfaction rating, the stability satisfaction rating, and the positive satisfaction degree score.

The age stage showed neither the worth living satisfaction rating score, the social support score nor the significant relation. An intellectual as person with high worth living satisfaction rating level was significantly high.

It has been understood that keeping with a high worth living satisfaction rating a high, is to keep intellectual level high, and to receive a lot of social supports. In addition, the change in the worth living satisfaction rating had risen in the crowd with a high intellectual change. An intellectual level rises according to becoming if the worth living satisfaction rating rises. Oppositely, it was confirmed to cause an intellectual decrease according to becoming if the worth living satisfaction rating lowered.

**Key words:** senior citizens, worth living satisfaction, social supports, intellectual decrease

